

平成 22 年度

## 病害虫発生予察注意報（第 1 号）

平成 22 年 6 月 2 日

茨城県病害虫防除所

**ネギベと病が多発生しています！防除を徹底してください。**

[ 発令の内容 ]

作物名：ネギ

病害虫名：べと病

発生量：多い

発生地域：県下全域

[ 発令の根拠 ]

5 月下旬現在，ネギべと病の発病度及び発生地点率は県南，県西地域で平年より高く，県央地域で平年並である（表 1）。

向こう 1 か月の気象予報によると，天気は数日の周期で変わるがぐずつく時期もあると予想されている。特に低温，多雨条件が続く場合には発病の進展に注意が必要である。

表 1 5 月下旬のネギべと病の発生状況

地域 (調査地点数)	発病度 <sup>1)</sup>		発生地点率(%)	
	本年(順位) <sup>2)</sup>	平年値	本年	平年値
県央(2)	0.5(6)	5.2	50	40
県南(2)	15.0(2)	3.8	100	25
県西(5)	13.8(1)	2.3	80	44
全県(9)	11.2(2)	3.2	78	37

1) 1 圃場当たり 25 株について発病の有無を調査し，葉身の病斑面積から次式によって算出した値

$$\text{発病度} = ((4 \times A + 3 \times B + 2 \times C + D) / (4 \times \text{調査株数})) \times 100$$

A：全葉面積の 31%以上に病斑が認められる株数。

B：全葉面積の 21～30%に病斑が認められる株数。

C：全葉面積の 11～20%に病斑が認められる株数。

D：全葉面積の 1～10%に病斑が認められる株数。

(参考：全て A の場合は 100，全て D の場合は 25，全て無発病の場合は 0 となる。)

2) 本年の発病度の順位及び平年値は，県西は過去 10 年間，全県，県央，県南は過去 11 年間中の数値

[ 防除対策 ]

発病が圃場全体に広がると、薬剤の防除効果が劣る場合がある。初期防除に重点をおいて表 2 を参考に薬剤散布を行い、その後の発病進展に注意する。なお、前年多発生した圃場では発生状況に特に注意し、初期防除を徹底する。

薬剤散布後は発病状況を確認し、効果が得られない場合は追加防除を行う。その際には他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

薬剤散布にあたっては必要に応じて展着剤を加用し、散布むらのないよう丁寧に行う。また、薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。

発病の激しい株は、伝染源となるので、出来るだけ圃場外に持ち出して処分する。多湿条件や多肥、肥料不足は発生を助長するので、圃場の排水対策をしっかりと行い、適正な肥培管理を行う。

表 2 ネギべと病に登録のある主な薬剤（平成 22 年 5 月 26 日現在）

系統 <sup>1)</sup>	薬剤名	希釈倍数 (倍)	収穫前日数 - 本剤の使用回数	有効成分 - 有効成分の総使用回数
	ランマンフロアブル	2000	3 - 4	シアゾファミド - 4
	アミスター20 フロアブル	2000	3 - 4	アゾキシストロピン - 4
+	フェスティバルC水和剤	1000	14 - 3	ジメトモルフ - 3 銅 - -
+	フォリオブラボ顆粒水和剤	1000	14 - 2	メタラキシル及びメタラキシルM - 4 (但し、種子粉衣1, は種後3) TPN - 3 (但し、土壌灌注1, 散布2)
+	プロポーズ顆粒水和剤	1000	14 - 2	ベンチアバリカルブイソプロピル - 3 TPN - 3 (但し、土壌灌注1, 散布2)
	アリエッティ水和剤	800	3 - 3	ホセチル - 3

1)同一番号は、同系統剤を示す。系統番号に対応する系統名は以下のとおり。

シアゾファミド剤, ストロビルリン系剤, ジメトモルフ剤, 銅剤, 酸アミド系剤, TPN剤  
有機リン系剤

**農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・回数・注意事項等を確認のうえ使用して下さい。  
また、薬剤散布の際は、周辺作物等への飛散（ドリフト）に十分注意して下さい。**